



おおぞら

第214号

2023年5月1日発行

発行責任者 荻野和功

編集者 木部哲也

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

在宅支援、移行支援と施設

所長 木部 哲也

昨年5月に行われた日本重症心身障害福祉協会全国施設協議会のテーマは「在宅ケア、移行医療と障害施設役割」で、その問いかけは「ケア能力、ケア認識の未来像は共有できているか」、「移行医療で未来像は共通化しているか」でした。今回は、そこで示された課題について、考えてみたいと思います。

東京都で短期入所利用を受け入れている施設からの報告では、利用者への医療的ケアとその決断についてのアンケート結果が示され、以下のようなことが窺われるとしています。即ち、①医療ケア開始年齢は幼少期（1〜5歳）が最も多く、基礎疾患を含め救命するため医療ケアが猶予なく始められている利用者が大半である。②医療ケアは成長・発達で軽快を期待され内科的に体調が維持されていたが、繰り返し誤嚥性肺炎等により、相対的に外科的な医療ケアの適応になり、相対的

であるが故、決断する猶予も断続的になる、保護者・主介護ケア能力・体力、世代交代の時期も相まって（医療ケアの開始が）15〜30歳前後に増える。③成人過ぎ頃から保護者のケア体力も低下する時期と重なり、在宅でのケア力の限界が意識され、いろいろな施設のケア者の意見も聞きながら医療決断をされている。

そして、施設の課題として、医療ケアが急変時に対応する医療機関と介護者の間で決められることより、個別性や独自性が高くなってしまうことや、急性期医療、訪問診療、短期入所施設の間で移行時期、介護者ニーズ、ケアに伴う事故のリスクの認識の差が大きいことを指摘していました。認識の差を埋めるべく、他施設の意見を聞く機会を設けることや関連施設と家族との間での合意形成カンファレンスの開催の必要性に言及されました。移行医療といわれる15〜30歳前後

に、医療ケアの決断がどのようなになされるかは大きな関心事です。また、年々変化する医療的ケアの個別性、独自性にどのように対応していくのか、おおぞらでも一つの課題となっています。地域連携の具体的な形を模索する必要があると感じました。

次に、総合病院の在宅診療科医師から移行医療と移行支援の現状についての報告がありました。重症心身障害を持つ人たちの移行医療は極めて困難な状況とした上で、その要因には以下の点があると指摘しました。

即ち、当事者からは関係性の変化への不安、総合的な診療を希望する、先々まで考えて行動する余裕などない、小児担当医師自身も先々まで考えて診療を行えない、その一方で年齢によって変わる利用可能資源や制度、疾患の変化、緩和的医療との接点、成人科の経験不足、移行医療コーディネータ不在、高度で複雑な医療的ケアへの対応、などです。

報告した医師は病院での移行支援の経験から、コーディネーター担当の医師の必要性や地域におけるネットワーク構築に加えて、多く

の例で「緩和医療的」見方が重要としていました。緩和医療的観点から移行支援の際に、医療者は今後の計画のために予後予測をたてる必要性があり、面談の中で、家族の思いと共に利用者の「意思」を聞く努力は必要と指摘しています。即ち、医療者及び支援者は、家族が子どものために良い選択できるように、十分な情報提供と対話を心がける必要があります。家族と関係者が真摯に向き合う機会としての移行支援の意義を強調されました。

在宅支援を行っているおおぞらにおいても移行期への関わりは利用者の未来像について、家族や関係者と共有する一つの機会として重要であると考えています。「ケア能力、ケア認識の未来像は共有できているか」、「移行医療で未来像は共通化しているか」という問いかけに答えられるよう、その役割を果たしていきたいと考えています。



すばるの

日常活動

松林 裕

Aさんは、日常生活で職員の笑い声が聞こえてくると、それを聞いて一緒に笑っていることがありません。会話の雰囲気を感じているようです。またCDプレイヤーから流れてくる音楽をよく聴いています。特にテンポの良い曲は顔を上げて笑顔で聴いています。

活動では、『まほうのレンジ』を語りかけました。「はらぺこリンリンはらぺこリンリン〇〇がたべたいな」と歌うようなフレーズになると目を大きく開けて職員の方に顔を向けながらよく聴いていました。その後、続く「チーン！」の擬音語で声を上げて笑っていました。リズムミカルな語りで気持ちが乗ってきて、最後に擬音語が出てくる変化に面白さを感じているようでした。

『やさしさにつつまれたら』を歌いかけました。

歌いかけをよく聴いていて、「カーテンをひらいて」と高音で伸びやかなフレーズになるところで表情を緩ませていました。サビの部分では高音で盛り上がりつついくメロディーや伸びやかな歌声に注目して、聴いているようでした。

『どんぐりころころ』をキーボードで職員が弾き始めるとAさんはキーボードの方に顔を向けて聴き始めました。始めは単音のメロディーでしたが、途中で和音が入ると目を大きく開けてはつとしたような表情になりました。単音のメロディーから和音になる変化が良



いようでした。

日常生活では感染対策をとりながら、昼間は部屋からリビングへ出て過ごしています。周囲で行なわれる活動や職員とのやりとりが感じられるような環境を設定しています。Aさんが活動をしているときは近くに利用する人も一緒に聴いて楽しんでいることがあります。またAさんも周囲で行なわれている活動に表情を緩ませたり、声を出して笑ったりすることがあります。これからもAさんの表出を大切に、楽しいと感じられるような活動を提供していきたいと思っています。



聖隷おおぞら療育センターにおける退院支援の役割

2,3号館専従退院支援看護師
神谷 美智英

聖隷おおぞら療育センター（以下おおぞら）で退院支援看護師の活動が本格的に開始されたのは2020年8月です。退院支援看護師の配置は、基本的に2病棟に1人が決まりですが、おおぞらでは現在、1号館の担当に播井、2,3号館の担当に神谷が配置されて活動しています。

退院支援看護師って何をする人？といまだに現場でも聞かれることがあります。退院支援看護師の役割とは、「患者が安心・納得して退院し、早期に住み慣れた地域で療養や生活を継続できるように、退院支援の積極的な取り組みや医療機関間の連携等を推進し、地域包括ケアシステム推進のための取り組みを強化する。主には、入院時のスクリーニング（退院総合評価）、患者・家族からの意向の

確認にもとづいた退院支援計画書を作成、多職種共同カンファレンス等を行い退院支援すること」（入退院支援プログラムより抜粋）とされています。難しいですね。

おおぞらの退院支援に私が関わり始めたのは、2021年10月です。おおぞらにおける退院支援ってなんだろうと、私自身もずっと考えながら日々を過ごしています。現在おおぞら退院支援看護師が介入しているのは、レスパイト入院と有期限入所の利用者さんです。病院から退院する時に、新規で社会支援を導入するような患者さんの退院支援とは違い、すでに社会支援を利用されており、在宅介護が確立した利用者さんが対象の退院支援です。そのため、病院で配置されている退院支援看護師とも活動内容は違っています。

おおぞら退院支援看護師は、在宅介護を支えるため、医療的ケアなど利用者さんを取り巻く様々な問題が発生した際に、



地域（かかりつけ医、訪問看護など）との連携を図っています。必要な医療全般を整えるかかりつけ医や、ご自宅での様子を知ることが出来る最も近い医療者としての訪問看護師、様々な社会支援の活用をサポートする相談支援専門員との情報共有などが主な役割です。ご家族以外に唯一夜間の様子をお伝えすることのできるおおぞらスタッフが、地域の関係機関と情報を共有することにより、調子を崩されたときの早期対応ができると考えます。在宅介護上の困り事が発生した場合なども、より近くて客観的な視点

で情報共有ができることにより調整のお手伝いができるよう活動しています。

気軽に知り合いなどへ「ちょっと見ていて」とお願いすることができない利用者さんを支えるご家族が、安心して「ちょっと見ていて」もらう事ができるおおぞらであるための一助として、私達が居ます。おおぞらも地域の社会資源の一つです。在宅介護での「困った」を、一緒に考えていける存在でありたいと考えます。安心して利用できるように地域の関係機関と手を取り合い、これからも在宅介護を支えていくよう努力して参ります。

入所成人のお祝い

中田 亮

あおばでは今年成人を迎えた方がいます。ささやかながら成人のお祝いをしました。折り紙や花紙で作った花や風船などでリビングを飾り付けクラシックの音楽を流して

成人式のような雰囲気を作りました。Aさんは車椅子に乗ってリビングに出ます。いつものリビングと違い音があまりなく、静かなためか動きを止めてじっとしている様子でした。職員1人1人が順番に本人の側に行き、お祝いの言葉をかけていきました。あおばで一緒に時間を過ごした職員、あおば以前のゾーンでの生活を知っている職員、職員それぞれがAさんと一緒に過ごしてきた経験を思い出しながら声をかけていきました。始めはぼんやりとしていたAさんですが1人目の話しが終わる頃には目を大きくして、はつきりとした表情になっていました。2人目が声をかけると視線を職員の方に動かしています。そのまま目の動きを止めてじっと聞いています。3人、4人と話しが続いて行くにつれて口元が緩み、よい表情になっていきます。男性、女性、高い声、低い声とそれぞれ職員の声の違いを感じているのか話しかけ始めには目や



口が動くことが多かったです。お祝いの言葉が終わり、職員が拍手をする。とこれまでよりもさらに目を大きくしていました。その後は、Aさんのおおぞらでの生活の写真のアルバムを本人を囲んで一緒に見ました。「このころはこうでしたね。」「こんなこともありましたね。」「と声をかけたり、周囲で職員同士が話しをしていると目をゆっくりと左右に動かしたり1点を見つめるようにして動きを止めていたり周囲の声や動きをじっと感じている様子でした。アルバムやリビングの飾りは次の日までもそのままにしておき、

当日参加出来なかった職員からも成人のお祝いの言葉をかけられ、じっと耳を澄ませて聞いていました。

Aさんは大きな音や声などは苦手な力が入ってしまうことがあり、優しく声をかけたり、ゆっくりとかかわることを心掛けています。そのためこのような催しでは緊張してしまわないかと心配もしていましたが、今年1番良い表情をしていたように感じました。普段の生活とは違う刺激を受けていたように見えました。これからも生活の中で楽しいと感じられるような刺激や経験がたくさん出来るように支援していきたいと考えています。成人おめでとうございませう！



新入・異動 職員紹介

●2022年1月

異動者

3号館

高山沙弥 (看護師)

●2023年度

新入職員・異動者

新入職員

あすか

小野風紗 (生活支援員)

うらら

杉本若菜 (生活支援員)

あおば

古橋美春 (生活支援員)

異動者

2号館

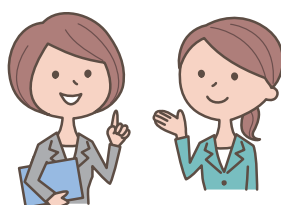
山越奈美恵 (看護師)

三浦亜妃 (看護師)

山田玲香 (看護師)

3号館

柳田千晴 (看護師)



よろしくお願いします

リレーエッセイ

「努力を楽しむ」

あさひ 佐野 茜

小学生男子2人の母です。身体を動かすことが大好きで、遊んでも遊んでも体力だけは誰にも負けないくらい元気いっぱいの子供たちです。いつも2人の行動に追いついていくのがやっとです。長男が2年生になったとき急に「サッカーをやりたい!」と言ってきました。初めて子供の口からこれがやりたいと宣言され嬉しかったのを覚えています。近くにクラブチームを見つけ入団しました。少年団とは違い、様々な学校から集まっているので学校の友達も増え、仲間とは切磋琢磨して練習に励んでいます。現在入団して約2年になり、子供自身は「プロサッカー選手になる!」と目標を掲げています。目標に向かって毎日楽しみながら努力している姿を見て、努力を楽しめるって素晴らしいな。と感じました。そしてやりたいことを見つけて夢に向かって頑張っている姿を見ていると刺激になり、わたしも子供に習って努力を惜しまず、夢に向かって楽しく母になれたらいいなと思いました。



おおぞら食事紹介



3月の食育献立は

ひな祭り

鶏の竜田揚げおろしソース
れんこんと海老の塩炒め
菜の花の白和え
桃のゼリー

メッセージカードを添えて提供しました。

桃の花の季節であるため、「桃の節句」とも言われます。中国で桃は「生命力」「不老」の象徴です。

また、春の訪れを感じる「菜の花」は、ビタミンC、β-カロテン、カルシウム等のビタミンやミネラルを豊富に含む野菜です。



50周年記念誌 制作中

聖隷おおぞら療育センターは、おおぞらの家から始まり今年50周年を迎えます。

この節目を記念して記念誌制作を開始しました。秋頃発行の予定でいます。



	1月	2月
ショートステイ利用者数 (延べ利用日数)	32人 (158日)	33人 (166日)
放課後デイ利用者数 (延べ利用日数)	15人 (49日)	12人 (44日)
実習者数 (グループ数)	0人 (0グループ)	0人 (0グループ)